



通信

2026.8.21

No.197

公益社団法人 福島原発行動隊

東京都千代田区神田淡路町1-21-7

静和ビル 1階A室 〒101-0063

Tel: 03-3255-5910 Fax: 03-3525-4811

Mail: svcf-admin@svcf.jp Web: http://svcf.jp

転居された方は事務局(svcf-admin@svcf.jp)まで転居先をお知らせください

暑中お見舞い申し上げます

書評・読後感

五感で歩く、神様から与えられた特別な時間

70代の生き方を率直に語る一冊

家森 健

私と同年代の作家、林真理子氏の名前は若い頃からよく知っていた。しかし、どうしても彼女の考え方や思想には馴染めないものを感じ、長年、距離を置いてきた。



一九八六年に彼女が直木賞を受賞した当時、どこかの週刊誌が「ブスでも貰える直木賞」などという、今では考えられないほど野蛮なバッシング記事を掲載していたのをよく覚えている。世間からそんな目で見られながらも、どこか幼稚で剥き出しの欲望を語る彼女の物言いが、当時の私にはどうにもしっくりこなかったのだ。

そんな私が、近頃ふと本屋で目を惹かれたのが、彼女の新書『80代になるとたいがいボケるか死ぬ。70代は神様から与えられた特別な時間』である。お互いに古希を過ぎ、人生の最終コーナーが見えてきた今、この刺激的なタイトルに誘われてページをめくってみると、驚くほど「なるほど」と納得する自分がいた。

写真1 林真理子氏の新書を手に取ってみると、厚さは五、六センチほどもある旧約・新約聖書である。私は仏教徒であり、キリスト教の熱心な信者というわけではない。聖書そのものに初めて触れたわけでもなく、新約の教えは多少なりとも知っていた。しかし、これほど重厚な「旧約聖書」を紐解くのは、私の人生で初めてのことだった。

特に深く共感したのは、第一章にある「健康なためだけに歩いてはいけない」という提言だ。氏は、ただ義務感で足を動かすのではなく、街を歩きながら五感のすべてを刺激することの大切さを説いている。

実は私も毎日の散歩を欠かさない。ただ歩くだけではない。街の匂い、季節の移ろい、人々の営みに視線を走らせる散歩は、まさに五感が研ぎ澄まされる最高の知的活動だと常々感じていたから、氏の言葉には膝を打つ思いがした。

五感を働かせて歩いていると、時に思いもよらないドラマに出会う。今年の三月、引っ越しシーズンのことだった。いつものように散歩がてら近所のゴミ収集所の前を通りかかると、信じられないものが目に飛び込んできた。なんと、ずっしりと重みのある立派な「聖書」が、ほかのゴミに混ざって捨てられていたのだ。

誰かが人生の節目に手放したのだろう。しかし、この一冊が内包する歴史や時間の重みを思うと、どうしても見過ごすことができなかった。そのまま自宅へ持ち帰り、静かにページをめくり始めてみた。この歳になって初めて触れる旧約聖書の言葉は、新鮮な驚きに満ちており、私の毎日に新しい彩りを与えてくれている。これもまた、五感を使って街を歩いていたからこそ引き寄せた、不思議な縁なのだろう。

本書の中で、林氏は「ずーっと長い事私はミソっかすであった。いつも外されてきた」という言葉を二度も使っている。かつて私が若い頃に感じていた彼女の「幼稚さ」や「しっくりこなさ」の正体が、この一言でようやく腑に落ちた。彼女は都会のエリートから「のけ者」にされ、傷つきながらも、それをエネルギーに変えて生身で戦い続けてきたのだ。その泥臭い生命力こそが、彼女の強さ



だったのだと、今なら理解できる。

若い頃には馴染めなかった作家の言葉が、同じ七十代を迎えた今、これほど素直に胸に響くとは思ってもみなかった。ふと振り返れば、林氏の言う「神様」という言葉と、私が散歩道で拾い上げた「聖書」が、今この手の中で不思議に響き合っている。五感を研ぎ澄まして歩き、偶然手に入れた旧約聖書をめくる私の日常もまた、神様から与えられた「特別な時間」の真っ最中なのだと、深い感謝とともに本を閉じた。

越谷のフラガール

安藤 博



平和にひたる夕べ

今年の＜越谷灯ろう流し＞は敗戦の日 8 月 15 日の開催であったため、いつもの年に増して戦争と平和を深く考える夕べとなりました。

＜越谷九条の会＞のメンバーが中心となっている「平和を願う音楽と灯ろう流しの夕べ実行委員会」が主催、今年で 21 回です。たまたまの縁で＜越谷九条の会＞の共同代表のひとりを務めているので、今年も千葉県の市川市の自宅から遠路埼玉県越谷まで出かけ、越谷市中央市民会館の東側を流れる葛西用水路に浮かぶ灯ろうをながめてビールを飲みながら、平和のありがたさにひたりました。

フラガール-虹を-

地元のおばさんおじさんのコーラス、声楽家夫妻の歌唱、ジャズなど多彩なアトラクションが続く中で、特に強い感動を覚えたのは、夕陽が落ちて灯ろうに火が入り用水路に浮かび始めた6時半ころに演じられたフラダンスです。はっきりとは聞き取れなかったのですが、確か映画『フラガール』の主題歌「フラガール-虹を-」（注1）でした。その歌とともに長崎から来られたダンサーが演じた踊りは、福島復興への思いにつながる美しくしみじみとしたものでした。

平和とは何か

灯ろうが流れ始めたころ、このイベントの実行委委員長を務める岡田能行さんが「平和とは何か、皆さん考えて下さい」と参加者に語りかけました。

ただ「戦争をしていないとき」というだけでは、平和の意味を十分に表すことはできない。岡田さんは「平和とは、戦争がない状態であるだけでなく、人と人とが協力し、支え合い、つながっていく営みである」と述べ、みんなで合唱して感動を分かち合うことも平和の営みの一つだとして、これからも人と人とのつながりを大切に、一緒に平和をつくっていききたいと語りました。

何ごとによらず即物的にしか考えられない私は、会場で売っていたカレーと焼き立てナンを食べながら「今夜に続いて明日はコーヒーとトーストの朝食が食べられるに違いないと思っていただける事、それが平和だ」などと”不埒な”ことを思っていました。

ウクライナの祈り

そんな自分の軽薄さに冷水を浴びせられるような思いになったのは、ウクライナ人のご夫妻が会衆の前に立たれた時です。お二人は声楽家のようで、ウクライナ民謡の「月明りの夜」（注2）をきれいな声で歌い上げられましたが、歌に先立って「皆さん、祈って下さい」と呼びかけてウクライナ語で「主の祈り」を捧げられました。人がこれほどひたむきに祈る姿を見たことはありません。このいつときでも人が死に傷ついている故国に、痛切な思いを馳せておられたでしょう。



日本全土を自民党が占領してしまわないように

平和のために、自分には何ができるのか。他にこれと言って出来ることはないので、この9月13日の沖縄県知事選挙で玉城デニー現職の再選が成るよう応援にいくことにします。2014年11月の翁長雄志選挙以来三回の知事選で自民党知事を生まないようにするための選挙応援に加わってきました。今度は玉城苦戦が伝えられています。いま自民党は、日本を戦争ができる国にしようと憲法9条の破壊をふくめあらゆる策謀を凝らしています。2026年年初めの総選挙で現れた自民圧勝の勢いは沖縄にも及び、沖縄4選挙区のすべてを自民党がおさえてしまいました。このうえでさらに知事までが自民党になれば、日本中をその自民党が占領してしまうようになります。

これまでは、選挙カーで那覇の町を走り回るようなことをしてきたのですが、沖縄の仲間から「超高齢者の車運転はダメ」と言ってきました。確かに”老骨に鞭打って”なのですが、悲壮感を持ったりしないでむしろ選挙戦を楽しむつもりでいます。

注1:「フラガール-虹を-」は、2006年9月23日公開の日本映画『フラガール』のテーマソング（作曲：ジェイク・シマブクロ、作詞・歌唱：照屋実穂）である。映画は福島県いわき市の常磐炭鉱の衰退、閉山寸前の炭鉱町を救うため少女たちがフラダンスを通して絆を深め、常磐ハワイアンセンター誕生に挑んだ奇跡の実話をベースとする感動作。松雪泰子、蒼井優の主演。富司純子（蒼井優演ずるトップダンサーの母役）、山崎静代、岸部一徳、徳永えり、池津祥子、高橋一生、豊川悦司などが出演し、日本アカデミー賞など数々の映画賞を受賞した。

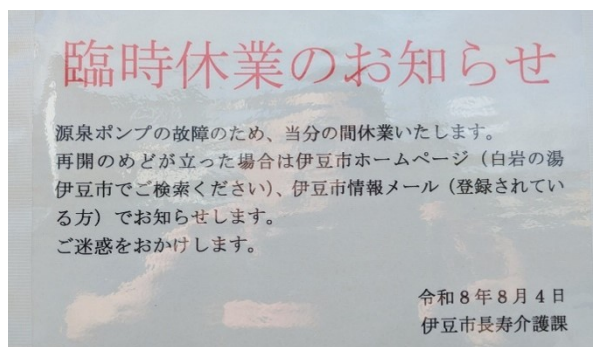
「虹」は、「雨のち虹、つらいことの後には必ず良いことがある」というハワイのことわざをもとにする希望の象徴で、映画の感動的なラストや余韻を彩るテーマソング。

監督は李相日（イ サンイル）。1974年、新潟県生まれ。新潟朝鮮初中級学校で教師をしていた父親を持つ在日コリアン三世。4歳の頃、一家で横浜に移り住み、横浜の朝鮮初級学校、朝鮮中高級学校に通った。高校3年に進級するまで野球部に。大学は神奈川大学経済学部に進学。卒業後、日本映画学校（現・日本映画大学）に入学。

『フラガール』のあと、2010年公開の『悪人』（妻夫木聡主演）で第84回キネマ旬報ベスト・テン、日本映画ベストテン第1位、日本映画監督賞・脚本賞、および第65回毎日映画コンクール 日本映画大賞などを受賞。2025年公開の『国宝』（吉沢亮主演）では、公開から半年で興行収入173億円を突破。22年ぶりに邦画実写歴代1位の記録を塗り替える歴史的な大ヒットを記録した。

注2 「明かりの夜（Ніч яка місячна / ニチ・ヤカ・ミシアナ）」はウクライナの民謡/伝統歌曲。心を静める美しく憂いを含んだ旋律が特徴で、平和への祈りを込めて日本でも吹奏楽やオーケストラ用に編曲され演奏されている。

ただいま番台失業中(><)



七月末、オイラが週に2,3回番台に座る伊豆市営温泉「白岩の湯」の源泉汲み上げポンプがクラッシュ。ポンプ業者は忙しく、盆を過ぎなきゃ修理はおろかどこが具合が悪いのか調べにも来られないと。

常連の独り暮らしのジーサン、バーサンたちは温泉じゃなくて沸かし湯でいいから休まないでくれと。

市の担当者に伝えたけれど、「温泉施設を設置する」と条例で定めているんでそーもいかないんだって。

やむなく8月下旬まで臨時休館。常連さんたちに電話連絡しまくれば、そんなア！と。

想像してみりゃジーサン、バーサンたち、一人で風呂沸かして浸かって掃除して、酷暑の中でやってらないよなア。

ということでオイラも臨時失業。

スタッフ、お客、機械、「白岩の湯」は老化の三冠王だ。

番台ばん吉ことイチエフウォッ
チャー中島

////////////////////////////////////

バリケード撤去を祝う

山田次郎



福島県立医科大学の薬理学教授をされていた大熊町生まれの木村純子さんは、東京電力福島第一原子力発電所の暴発事故を受けて政府が発令した「避難指示」により家を追われ、いわき市での避難生活を余儀なくされてきました。それが、この春になって「大熊町の帰還困難区域への立ち入り規制を緩和する」旨の行政措置が執られ、帰還困難区域内の家屋を外と隔てるバリケードが撤去されました。15年ぶりに、自宅に自由に入出入りし届け出れば宿泊も可能になったことで、事実上「避難指示解除」になったと木村さんは喜んでます。



バリケードがなくなって表の通りに向かう道が開かれている。これまでは、下の写真のように閉じ込められていた。

お盆近くの日、木村さんは小学校の同窓生や親類、家屋の保全に協力してきた植木屋さん、そして同じ大熊町で果樹園



の造成に取り組んでいるフランスからの移住者などを大熊町の家招いてささやかな祝宴を開きました。

立ち木に囲まれた家には夏でも涼しい風が通り、大きな西瓜を冷たい井戸水で冷やして賞味してもらいました。

原発事故から10年余を経て自宅の放射能汚染度は、避難指示の根拠となった数値を十分に下回っていることを専門の線量測定業者の測定で確認した木村さんは、自宅が帰還困難区域に取り込まれたままの状態が続けられる事は憲法が保障する「居住の自由」の侵害であるとして早期の「避難指示解除」を行政に求めてきました。この申し立てに、福島原発行動隊も野党議員の国会質問を用意する等で協力してきました。

バリケード撤去で自宅に自由に出入りできるようになったとはいえ、行政が正式に「避難指示解除」を行ったわけではありません。避難指示解除は以下の「3つの条件に照らして判断をすること」とされています。

- ① 空間線量率で推定された年間積算線量が 20 ミリシーベルト (mSv) 以下となることが確実であること
- ② 電気、ガス、上下水道、主要交通網、通信等日常生活に必須なインフラや医療・介護・郵便等生活関連サービスが概ね復旧すること、子供の生活環境を中心とする除染作業が十分に進捗していること
- ③ 県、市町村、住民との十分な協議がおこなわれること

問題は「除染作業が十分に」です。木村さんは「環境原理主義者」とも言えるほどに自然保護を大事にしている、土壌をはぎ取り樹木を切り倒すことにもなる「除染」を甚大な自然破壊だとして強く忌避しています。「汚染度が十分下がったことで避難指示を解除しようというのに、何故除染などしなければならないのか」と。

木村さんは、かつて県立医科大の教官だったころ福島市に住んでおられて週末ごとに車で大熊町の家に戻っていました、「あの頃はずいぶん炭酸ガス (CO2) を出してしまった」といまになって悔いておられるのです。



5 年ほど前、わたしたち行動隊は人手がないためジャングル状態になっていたお庭の畑地を刈払い機にものを言わせて雑草をすっきり切り倒し、当時 95 歳くらいで純子さんと一緒に大熊町のお宅の見回りに来ておられたお母さんから「7 年ぶりにお隣りの家の屋根が見えました」と腰を 90 度に追って感謝されたものでした。しかしいまは、CO2 を出す刈払い機は使えません。全て手作業。そもそも雑草を刈払うことはせず、野菜も草花も雑草と共存の自然保護農業で行くよう指示されているのです。

「帰還困難区域への立ち入り規制緩和」は、こうした木村さんの強硬な「自然保護/除染反対」に「手を焼いた」行政側が、正式の「避難指示解除」を棚上げにしたうえ、なし崩しの解除を図ったのではないかと思います。

雑草に負けず「健気にも」トウモロコシが葉を伸ばしている

【 行動隊 9 月スケジュール 】

● 第 161 回院内集会

9 月 17 日 (木) (予定)

テーマ：「福島第一原発の廃炉作業の進捗状況」

講師 (予定)：東京電力廃炉カンパニー、廃炉等支援機構 (NDF)、資源エネルギー庁

● SVCF 通信第 198 号発行

9 月 25 日 (金) (予定)

● 連絡会議

以下の各金曜日 10:30-4、11、18、25

